練習文1（千字）

（スタート）

ああああああああああああああああああああああ、いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい、ううううううううううううううううううううう。えええええええええええええええええええええええ、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお。かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか。

きききききききききききききききききききききき、くくくくくくくくくくくくくくくくくくく。けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ、こここここここここここここここここ、きささささささささささささささささささ、しししししししししししししししし、すすすすすすすすすすすすすすすすすすすす。せせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせ、そそそそそそそそそそそそそそそそそ。

たたたたたたたたたたたたたたたたたたたた、ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち、つつつつつつつっつつつつつつつつつつつつ。

てててててててててててててててててててて、ととととととととととととととととと、なななななななななななななななななかな。にににににににににににににににににににににに、ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ、ねねねねねねねねねねねねねね、のののののののののののののののののののののののの。

ははははははははははははは、ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ。へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ、ははははははほはははほほははほほははははは、まままままままままままままままままま、みみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみ、むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ。めめめめめめめめめめめめめめめめめめ、もももももももももももももももももも、やややややややややややややややややややや、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ。

よよよよよよよよよよよよ、らららららららららららららもらららもらら、りりりりりりりりりりりりりりつりり、るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる。れれれれれれれれれれれれれれれれれれ、ろろろろろろろろろろろろろろろろろ、わわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ、んんんんんんんふんんんんんんんんんんん。

（ストップ）

練習文2（千字）

（スタート）

論理とは思考の一般的法則であり、思考とは事物を認識せんが為の判断、推理を意味する。

しかるに、今日的状況における感覚の源泉たる認識の対象は不断の変化を伴うがゆえに、眼前の対象に対し、感覚表象をかくたる基準を満足たらしめるに充分な哲学的一般性を欠き、そのことがより一般性を持った世界観を創出する価値判断をなお一層困難たらしめている。

万物創生における形而上学的蓋然性にかんがみ、人類を媒介とする法則性に寄与すべき特殊的自己崩壊の散発的な兆候はこれを認めうるに足らず、均質的な社会における状況把握が困難とはいえ、なお前衛約可遡性を失ってはいない。

文明社会における主たる経営主体を無対象的に粉飾している一般的原理もこのカテゴリーに属するゆえに、その限界代替性は明白ではなく、それゆえ後者の精神的価値は構造化されていない。あるいは前者の啓示により論証されうるべき関係が暴露された可能性を否定できない。なぜならば一般に文明を文明たらしめているのはまさにその論理であるからである。

逆にいえば我々がその存在を認知しえない対象にさえ、この一般的原理は該当し、種々の矛盾を生じさせていることになる。すなわち、ある種の後進性を持った主体はその真理の試行に際し厳然たる選択権を行使するのである。それゆえ、その種の存亡はただ一点、いかにしてその獲得した生物学的権利を保持するかにかかっている。

されほどて。その論理は必然的に永続性を備えているとは限らない。ある種の人間、たとえば自らの存在を容認しえない哲学者などは、このような場合嫌悪感を抱くであろう。自らの置かれた環境を絶えず監視しその方法がいかに古典的であるかを吹聴し、それが使命であるかのような錯覚を抱きつつも、その存在意義は希薄である。

意識的にせよ、無意識的にせよその犯罪的意図は明白である。精神的葛藤があるにせよ、その方法論を論じた場合やはり非難されるべきであろう。けだし人間を人間として認識せしめているものは包括的目的性である。さらにいえば、経済的影響のもとに最低限の生活を余儀なくされつつも人格的欠陥をあえて否定しうるに足る危機的状況を無視できないとの認識に立ってこれを再考する必要があろう。現代社会におけるこのような認識論に立脚し、なおかつ冷静な判断を失わずにこれに対して論駁するには合理性が必要となる。我々はこのような無価値論的日和見行動は厳に慎しまねばならない。

（ストップ）

練習文３（千字）
（スタート）
ゴンタが初めて小百合に会ったのは、二月の雪の降る日の京都だった。雪景色の京都はゴンタの疲れた心を、透明な優しさで包んでくれていた。だれかの気配にふと後を振り向くと、五メートルほど後を和服姿の小百合が歩いていた。小百合は、ゴンタの目を見つめ、突然いった。
「あのう。あなた、ゴンタさんでしたね。」
「はっ？」
「いいえ。」
そのまま小百合はゴンタの前を通りすぎていった。ゴンタには心あたりがまったくなかった。きつねにつままれたようで、ゴンタは小百合の後を追うこともなく立ち止まっていると、小百合は路地に消えていった。
次に、ゴンタが小百合に会ったのは、その年の桜が満開の頃だった。ゴンタは会社の同僚数人とともに花見酒としゃれていた。酔いがまわり、公園の桜の下で大声で「エイトマン」の主題歌を歌っていると、隣の家族づれがしかめっつらでこちらをにらんでいた。ゴンタは、「ゲッタラポンポンペポチャッタ」とわけのわからないことを叫びながら服を脱ぎだし、すっぱだかになって桜の木に登った。木の上で「大日本帝国万歳！」と叫んでいるとすぐに警官が二人やってきて引きずり降ろされた。パトカーに連れていかれる途中、小百合が着物を着て立っているのにすれ違った。その時小百合がぼそっといった。
「ゴンタさん、あなた大物ですね。」
小百合の方をふりかえりながら連行されていくゴンタの目に、小百合がふかぶかと御辞儀をしているのが映った。
六月、梅雨の日の午後。美術館の絵の中に小百合はいた。ある新進画家の入選作のモチルが彼女だった。絵に描かれた着物姿の小百合の目はゴンタの目を見つめ、なにかを語りかけているようだった。
八月、ゴンタはインドに旅をした。列車の中で知りあった人がゴンタを気に入り、自分の家に泊めてくれた。その人の家族全員といっしょにテレビを見ていると、小百合の着物姿がほんの一瞬映った。インドの独立記念式典ということで、彼女が何者かはわからなかった。
十月、ゴンタは人のいない日本海の浜辺でひとりウィスキーのポケット瓶を飲んでいた。小型のヘリコプターがさっきから頭上を飛んでいた。ヘリコプターに向かって「やかましい」と怒鳴ると、小百合がヘリコプターから身をのり出し「ゴンタさあん」と叫んで振袖の手を振った。ヘリコプターはそのまま飛び去った。
雪の降るクリスマスイブの夜。ゴンタと小百合は小さな教会で結婚式をあげた。
（ストップ）

練習文４（千字）
（スタート）
ゴンタと小百合が結婚して初めての正月、二人は山陰の、とあるひなびた温泉に旅行した。
ゴンタが露天風呂につかっていると、隣の女湯のほうから「ゴン、ゴン、タンクにゴン」という小百合の歌声が聞こえてきた。男場にも女湯にも他の客はいなかったので、ゴンタは男湯と女湯の境界の岩ごしに小百合に話しかけた。
「サユリっちゃん、遊びましょ。」
「避ぽ、避ぽ、何して避ぽ。」
「宇宙人ごっこして遊ぽうか。」
「それ、いいね。あたしガンダラ人になるから、あなたベラメッチャ人になって。」
「いいよ。ほれ、パッパラパーのベラメッチャ、ポンタミンのビビンガビン。」
ゴンタはその言業をなにげなく口からでまかせに言ったにすぎなかった。しかしそれは銀河系同盟の最高機密であった。銀河系のすべての惑星に設置されているセンサーの一つが偶然その温泉の地下二千メートルにあったのだ。その後二年間のベラメッチャ人による地球占領はこのようにして始まった。
ベラメッチャ人による地球占領は暴力的なものではなく、逆に飢えや病気、貧困などの地球上のさまざまな問題を解決してくれた。占領軍の指導のもとに誕生した地球連邦政府の決定は占領軍のチェックをうけるので一部の者は不満を持ったが、大多数の人類にとってはベラメッチャ人の登場は歓迎すべきものであった。
奇妙なことに、銀河系同盟の最高機密を口にしたのがだれであるか、ベラメッチャ人の必死の調査にもかかわらず、ゴンタが関係しているらしいとわかるのに二年間かかった。占領軍総指令部に連行されたゴンタはさまざまな装置を使って調べられた。不思議なことにどの検査でも、ゴンタは有罪とも無罪とも判定できないのであった。
小百合は占領軍総指令部に抗議に行き、ゴンタの釈放を強く求めた。小百合の姿を見たベラメッチャ人はなぜか皆恐怖に青ざめた。ゴンタは丁重に扱われ釈放された。ベラメッチャ人による地球占領はこうして突然終わったのである。ベラメッチャ人は一人残らず地球を去り、地球と銀河系同盟の間には一切の通信手段さえ残されなかった。
「よかったねゴンちゃん。」
「うん。でもどうしてこうなったの？」
「あなったって、本当に大物ね。」
「えっ？」
「ううん、いいの。」
こうして二人はまた楽しい生活を送ったのであるが、マスコミの取材がやかましく、二人はアマゾンの奥地にひっそりと隠れて暮らすことになったのである。
（ストップ）

練習文5（千字）

（スタート）

ゴンタと小百合がアマゾンの奥地での生活に慣れてきたころ、ゴンタは川で魚を釣っているときに半魚人に出会った。ゴンタは量初少し驚いたが、この半魚人が食べられるかどうか考えていた。

半魚人のはうはゴンタを見て経験したことのない恐柿にかられた。今迄は人間を見ると捕まえて食べていたのだが、今回はただの人間ではなく、なにかとてつもない化物を見たように感じた。ギョエーッと叫び声をあげて、急いで川の中に潜っていった。

密林の中にある小屋に戻ったゴンタは、小百合に半魚人と出会ったことを話したが、小百合は「あらそう。」というだけで関心を示さなかった。

それから数週間がたち、二人とも半魚人のことは忘れていた。ある朝、目が覚めると小屋の前にかごに入った魚が置いてあった。

次の日の朝、ゴンタが用をたしに小屋を出ると、数人の半魚人達と出会った。半魚人達はゴンタの姿を見ると地に平伏して、半魚人語でなにかをいったが、ゴンタにはその言葉がわからなかった。ゴンタは半魚人を食べるという気がなくなっていたので、彼らがゴンタのほうを振り返りながら立ち去るのを黙って見ていた。

このようなことが数ヶ月続いて、ゴンタは次第に半魚人の言業を覚えるようになった。半魚人達はゴンタのことを半魚人語で「偉大なる魚」と呼び、小百合のことを「偉大なる人間」と呼んだ。小百合は彼らに掃除や洗濯を手伝ってもらい、家事が楽になったと喜んだ。

ゴンタの小屋によくやって来る半魚人の中に、ギョッパという若者がいた。ギョッパが最近元気がないので、小百合が声をかけたところ、ギョッパは自分の悩みを打ち明けた。ギョッパが海水浴に行ったとき、人魚のマリンと出会い、二人はたちまち熱い恋に落ちたのだった。だが、上半身が魚で下半身が人間の半魚人と、上半身が人間で下半身が魚の人魚とはなさぬ仲であった。両者とも昔から、相手を自分たちが軽蔑する人間以下の存在だと思っていた。両方の親は二人の結婚に猛反対で、ゴンタと小百合が二人の親に結婚を認めるように説得することにした。

ゴンタがギョッパの両親を訪ねると、しぶしぶ二人の結婚を承諾した。小百合はマリンの親を説得に行った。

「あなたたち、古い考えは捨てなさい。今は、ゴンタと私でさえ結婚する時代よ。半魚人と人魚ならちょうどいいじゃない。」

小百合の説得も成功し、ギョッパとマリンは結婚した。

ギョッパとマリンの間には、人間の子供が生まれた。

（ストップ）

練習文６（二千字）

（スタート）

小百合はアマゾンの奥地に移り住んでからも、ずっと和服を着ていた。ゴンタがいくら動きやすいものを着るようにいっても、頑として聞き入れなかった。

小百合は小屋に着付教室の看板を出していた。半径五十キロの範囲には二人以外の人間が住んでいないので、だれも着付を習いにこないだろうことは。ゴンタでもわかった。

ある日、小百合がジャングルを歩いているときに、着物の袖を木にひっかけてしまい、一番お気に入りの着物をだめにしてしまった。

「ねえあなた、一つお願いがあるの。この前、着物がだめになったでしょ。あたし、あれ気に入ってたの。あれと同じ着物買って。」

「着物を買うといったって、ここから日本は遠いし。第一、お金がまったくない。だめ。」

「あなたは、前はあんな大物だったのに、いつからそんなけちになったの。ふんだ。それじゃ、自分で稼ぐわ。パートに行くわ。」

次の日から小百合は午前九時から、牛後五時までどこかに行って姿を見せなくなった。どこに行っていたか尋ねても、「教えてあげない。べーだ。」としかいわなかった。

数週間が過ぎ、小百合もやっと機嫌がなおってこういった。

「実は、あたしスーパーにパートに行ってたの。」

「スーパーっていっても、ここからだいぶ遠いだろ。それに、君はポルトガル話が話せないし。」

「ブラジルじゃなくて、日本のスーパー。」

「それじゃ、なおさら遠い。」

「実は、あたし結婚するとき、実家からＵＦＯ持ってきてて、それに乗って日本のスーパーまで通っていたの。」

「あれっ、君って宇宙人だったの。そういや、おれ、君の実家に行ったこともないし，君の両親に会ったこともなかったっけ。」

「そうね、明日わたしの実家に二人で行きましょうか。ちょっと遠いけど。ここからだと、千光年ぐらいかな。」

小百合のＵＦＯで実家のガンダラ星に行くと、小百合の父スッタラカと母ボンコレラが待ち構えていた。

「やあ、ようこそゴンタ君。」

「はじめまして。ゴンタです。」ピョコン。

「まあ、堅苦しいあいさつはおいといて。酒でも歌もう。」

スッタラカはゴンタにしきりにパンカラ酒をすすめ、自分も上機嫌で飲みだした。

「最近、仕事の方はどうがね。」

「まあ、仕事といっても、川で釣をするくらいで、気楽にやっています。」

「そうか、そうか、それは良かった。まあ、もう一杯。」

スッタラカは飲めば飲むほど上機嫌となり、酔いのため妻のボンコレラの前だということも忘れて、浮気相手の女のことまでしゃべり始めた。

「まあっ。あなたったら。浮気していたんですか。」

ゴンタも酔いつぶれていて、その後のことは覚えていない。気がついたら、アマゾンの小屋で寝ていた。小百合が達れ帰っていたのだ。

「しかし、君のお父さんは酒が強いなあ。」ゴンタにはそれだけが強く印象に残っていた。

「ねえ、あなた。どうして私が宇宙人だとわかった時、驚かなかったの？」

「ぼくは、別に人種差別主義者じゃない。」

「そういう意味じゃなくて。普通、地球人って宇宙人を見ると驚くでしょ。」

「ぼくは別に驚かない。」

「あなたは持別よ。うちのお父さんが、あなたのことをとても気に入ってね。あなたが酔いつぶれて寝た後、あなたが大物だと感心してたわ。あなたをお父さんの後継者にしたいっていってたわ。」

「お父さんは何をしている人？」

「銀河系同盟の議長をしているの。銀河系で一番偉い人よ。」

「おれはそんな仕事したくないなあ。今の生活に充分満足している。」

「まあそういわずに。来週もう一度実家に遊びに来るようにいってたわ。行ってくれるでしょ。」

次の週二人がガンダラ星に行くと、星をあげての歓迎となった。スッタタラカ以下銀河同盟の幹部が全員ゴンタに土下座していた。

「ゴンタさま、知らぬこととはいいながら、先日は大変ご無礼のほどお許し下さいませ。これ小百合、頭が高い。このお方をどなたと心得る。ヘポチャッタカンカンでいらっしやるぞ。おまえもこちらにきて土下座しろ。」

「あらそう。ゴンちゃんはヘポチャッタカンカンだったんだ。」

「もう、この子は。昔からずれてたからなあ。とほほ。」

「いいでしょ。今まではただの地球人だと思っていても、私の大切なゴンちゃんだったし、ヘポチャッタカンカンだとしても私の大切なゴンちゃんに変わりはないんだから。」

「小百合、身分が違う、身分が。お前のような者が、ゴンタさまの奥方になるわけにはいかない。身を引け。」

ゴンタには小百合とスッタラカのやりとりの意味がまったくわからず、口をあんぐりと開けて二人を見ているだけだった。小百合は突然ゴンタの腕をつかみＵＦＯに速れ帰り、そのまま地球に帰ってきた。

「ねえ、いったいどうなってるの？」

「いいの。あなたはなんにも気にしなくても。ねえ、ゴンちゃん。」

「ん？」

（ストップ）